旧大阪砲兵工廠化学分析場

旧大阪砲兵工廠は、大阪城の東側に位置する広大な軍需工場であった。1870 年に日本が軍隊の近代化を始めた頃に設立された。第二次世界大戦時に日本軍が使用した大砲を始め、膨大な数の武器と装備を生産していた。生産のピーク時には、約 6 万人の労働者がここで働いていた。
工廠の大部分は、終戦の前日に米軍の爆撃によって破壊され、残った部分も後に取り壊された。ここに設置されていた化学分析装置が、唯一破壊を免れた建物であった。戦後、ここは官庁として利用されたが、後に大阪大学工学部の一部になり、1994 年まで自衛隊の地方連絡事務所であった。近くにある大量の鉄材残滓は工廠での精錬から生産されたものの一部と考えられている。